

小学校 5 年
特別活動（朝の会等）

キーワード 視覚的な支援
デジタルカメラ

「はきものをそろえよう」

1 活動の目的等

目標



トイレのスリッパや靴箱のくつがきれいに揃っていない現状をデジタルカメラによって視覚的に提示することにより、望ましい状況を理解させるとともに、整理された状態の美しさや気持ちよさに気付かせ、進んで履物をそろえようとする態度を養う。

2 指導略案

指導のタイミング

本事例は、通常の45分（小学校）の授業ではなく、朝の会や帰りの会といった短時間での指導である。そのため、学級または学年の様子や実態に合わせて、指導するタイミングを考える必要がある。また、10分程度の指導を一定期間をおいて継続し、効果を上げることができる。

展開

教師の働きかけと情報機器の操作	予想される児童の反応
デジタルカメラをテレビに接続し、双方の電源を入れる 「今から、みんなに見てもらいたい写真があります。2つ見せますので、気が付いたことを後で教えてください。」	「何が始まるのかな？」 「どんな写真だろう？」 「2つあるから、どこがちがうか見つけてみよう。」
1枚目のトイレのスリッパを見せ、整った状態のきれいさや気持ちよさに気付かせる。 「どんな感じがしますか？」 	「トイレのスリッパだ。」 「ちゃんとそろえてあるぞ。」 「そろっていると気持ちいいね。」 「次の人が使いやすいね。」
次の2枚目の写真を見せ、違いを考えさせ、思ったことや感じたことを自由に発言させる。 「1枚目と、どこが違いますか？」 	「さっきとちがって、バラバラだあ。」 「裏返っているのもあるよ。」 「でも、1枚目と同じトイレだ。」 「ぼくたちが行ったときは、いつもこんなだよね。」 「なんか、いやな感じだね。」 必要に応じて、1枚目の写真と交互に見せ、違いが分かりやすいようにする。
これから、どのようにトイレを使っていけばよいか、考えさせる。 時間があれば、数人発表させる。	「やっぱり、きれいにそろっていた方が、気持ちがいいね。」 「次の人が、使いやすく向きをそろえるといいね。」 「次からは、きちんとそろえてみよう。」

3 展開の実際

本事例は、5月の連休明け頃の実践である。5年生という高学年になって、1か月が過ぎ、ある程度緊張感も解けて、友達との関係を築きながら、少しずつ気が緩んでくる時期でもある。本校は、5年と6年の教室が同じ階にあり、1か所のトイレを共有している。従って、トイレのスリッパがそろっていないのは、1つの学年だけの責任ではない。ここで、隣学年での共同歩調が必要になる。それぞれのクラスで、「トイレのスリッパをそろえよう」という指導をすることになり、その機会を捉えて実践を行った。

実際には、朝の会の直前に児童のトイレのはきものがそろっていない状態、次に、きれいに整頓した状態を1枚ずつ撮影し、教室へ向かい指導を行った。

最初に、はきものが整った状態の写真を無言で提示した。何が映るか期待していた児童はあまり反応を示さなかった。続いて、はきものがそろっていない写真が映ると、「うわー！きたない！」「バラバラ！」という声があがった。補足として「これは、ついさっき、みんなのトイレで撮ったものです。」と言うと、「えー?!」「やっぱり!」という声が聞こえた。普段目にしていないトイレのスリッパでも、改めて写真で比べられると、使い方がいかに悪かったかが感じられたようだった。

本学級には発達障害の児童が在籍しており、教師と一対一で落ち着いて話すと、スリッパをそろえることの必要性は理解できるが、実際の場面では、他にやりたいことがあるとなかなか実行することが難しい。また、学級全体には、「だれがそろえないのか?」といった雰囲気が見られたため、対象児童への支援も考慮した学級全体への指導を行った。

4 情報機器等の活用の工夫

【デジタルカメラの即時性】

学校での指導には、即時性が求められる場面があるが、デジタルカメラの「撮影後すぐに見ることができる」という特性により、今指導しなければならぬことを視覚的に提示することができる。しかも、テレビのビデオ端子に接続できる機種もあり、撮ったその場で、テレビの画面で児童に見せ、情報を共有することが可能である。

本事例では、授業時間以外にも、スリッパがそろっている写真をトイレに掲示し、望ましい状態を児童に意識させるようにした。また、スリッパが整っている日の写真を印刷、掲示して、そろえることが何日続くか挑戦させることで意欲を持続させることができ、対象児童も写真が増えていくことを喜んでいった。

【提示の工夫】

授業等の中でデジタルカメラを活用するには、提示のタイミングと提示する写真が重要である。集中の持続や注意の切り替えが苦手な児童生徒にとっては、写真がなかなか投影できなかつたり、目的以外の写真が雑多に投影されたりすると、目的の写真に注目し、教師の話を聞くことが難しくなる。

そこで、テレビに提示する場合、デジタルカメラに撮っておいた画像を事前に確認するとともに、電源を入れる順番も配慮した。本事例では、撮影する画像と提示する画像の順番が逆となるため、事前に他の画像は全て消去し、必要な画像だけしておく。更に、ケーブルを接続した後、デジタルカメラの電源を入れ、2枚目に撮った整頓されたスリッパの画像をデジタルカメラのモニタに表示させた後、テレビの電源を入れた。こうすることで、提示する写真の画像を間違えたり、全く違う画像が表示されるのを防いだりすることができ、児童は待たされることなく画面に注目できた。



USB 端子から映像と音声も出力可能

5 情報機器等の活用の効果

本時の、「2つの写真を見てどうだった?」という発問に対しては、対象児童からも、「そろっていた方が、気持ちがいい。」「使いやすい。」といった意見が聞かれた。言語のみの説明や指導よりも、視覚的にとらえさせることで、理解しやすかったと思われる。生活習慣的な指導については、短時間でも継続して指導していくことが大切であり、今後も、靴箱のくつ、ロッカー等についても、時期を見て同様の指導を進めていきたい。

また、対象児童については、視覚的な支援の有効性が認められたので、写真と合わせて、絵カードやシンボルを活用したスケジュールボードや校内掲示の工夫等の支援を検討していく予定である。